

火星



平成19年9月号

七曜抄

(四)

山尾玉藻

椎の花祭ふどしに降りにけり

みづうみを渡つてきたる土用餅

街道を雨の走りし土用餅

竹生島の夕焼たぐる投網かな

竹生島へ首まはしけり蝸牛

峰雲へ千体仏堂閉ざしあり

溝川の音の夜に入る地藏盆

盆過ぎの風見えてゐる杉の鉾

八朔の電話口より機の音

黄檗の聯摺みゐるいぼむしり

太白星

柳生千枝子

白靴の鳴り癖いつも独りの歩
ねらひ居る蠅取蜘蛛を見てをりぬ
易々と蠅取蜘蛛の消えてをり
べビー靴真白そのまま抱かれけり
七月の雲遊びゐて陽を洩らす
ライターを点け六月の闇濃かり
汐騒の絶えずおぼろの月上る

杉浦典子

ひらきたる喉あかるし鬼をこぜ
おとうとに頼りてゐたり花石榴

マンホールの蓋の蝟の絵南吹く
坑道のあたまを低うして涼し
母がりへ橋の架かれり螢の夜
蛇泳ぐ池のくびれてゐるところ
授業済みし声に泰山木咲ける

浜口高子

御旅所のバケツの田螺鳴きにけり
地震あとの両掌に熱き一夜酒
我が影の中の牡丹剪りにけり
この辺で引き返さうか蛇苺
山湖に掌沈めて痛し夏の月
盲杖塚のうしろあやめの濃かりけり
釣り上げし鮎旱天へ跳ねにけり

火星作品

山尾玉藻選

走り茶の香りたどれば鳳凰堂
雨あとの草のしづくす鶺鴒小屋かな
涼み舟宇治十帖に棹させり
たけなはと言ふしづけさの薪能
鶺鴒舟出を待つてゐる暑さかな
万緑のなかそよぎゐる母の葱
またたびの花や湯治の昼の径
足攣りぬ祭だいでこの夜を眠り
夕立のきたかかと聞の父の声
弔うて術なく白玉掬ひけり
早々と水打つてある佳日かな
心太中肉中背眼鏡なし
短夜の預りし子のうす脛

八幡丸山照子
宝塚山田美恵子
姫路高尾豊子

茄子の花あまた咲かせて母死にし
青空や代田に映すけふの顔
馬の鼻ふくらむ梅雨の中休み
琉金の眼と会ひにけり夏の風邪
耳成山にひらたき月や墓交む
青菽の丈そろひけり鑑真忌
早星父の正座のひくかりし
十薬やあやふき岩に上りをり
水呑んで水面見てゐる夏の鴨
くちなはや蓬萊島に泳ぎ切り
蓮見舟明るき水へ漕ぎ出せる
泥曳きて泥に分け入る蓮見かな
落人に吊橋ひとつ明易し
蚊を打つて父の昔を聴きゐたり
父の日の樟の翼の大きいなる
いま虹の真下にゐると知らさるる
火蛾落ちし水のさざ波なりしかな

大和郡山 城 孝子

神戸 深澤 鱻

明石 戸栗 末廣

選のあとに

山尾 玉藻

たけなはと言ふしづけさの新能

丸山 照子

夕闇が濃くなると篝火が舞台を照らし始め、辺りはいよいよ幽玄の趣を深めてゆく。舞台も佳境に入り、さざめいていた観客も今は静まり返っている。掲句は、そんな頃合と情景を、「たけなはと言ふしづけさ」と巧みに言い止めて見事である。時折、謡曲と鼓の音に誘われ篝火の爆ぜる音がひびく。

万緑のなかをそよげる母の葱

山田美恵子

「万緑」と言う大きな季語の真意を捉え、一句に凝縮するのはなかなか困難である。その点掲句は、モンタージュとしての「母の葱」をぐっと絞り込み「万緑」を詠み上げた。母が育てる葱畑は「万緑」に対して対極的なちづけな存在であるが、読み手のこころの風景のせとなつて、「万緑」のイメージをより大きく確かなものへと膨らませてゆく。「そよげる」の描写は、母を思う作者のこころの写生でもある。

茄子の花あまた咲かせて母死にし

高尾 豊子

作者の以前の作品に「母逝きて三十本の胡瓜採む」があり、亡きお母さまは野菜作りの名人であった。今年も茄子は次々と花を結び、その様子はお母さまが健在であった頃と違わないのだらう。作者は畑に立ち、今さら母の無いことをつくづく実感しているのである。「茄子の花」のうす紫色が切ない。

琉金の眼と合ひにけり夏の風邪

城 孝子

「夏の風邪」は暑さも手伝つて気愈く辛いものである。作者もそんな身を持って余し気味であったのだらう。「琉金」は腹部が張り鱗も長く、涼やかで流麗である。そんな琉金に圧倒されいよいよ萎え入る作者の心情が、「琉金の眼と合ひにけり」によく窺える。「夏の風邪」ならではの感受受である。

蓮見舟明るき水へ漕ぎ出せる

深澤 鱒

神々しい花蓮であるが、それが一面に咲く景はどこか翳りをおび、計り難い寂しさを感じるものである。花蓮が浄土の花とされ、彼岸此岸を意識する所為かも知れない。舟で花蓮を巡っていた作者もその様な感慨にふけり始めていたのであろう。そんな中、舟が花蓮の群から滑り出ようとした所を、「明るき水へ漕ぎ出せる」と捉えたのである。何気ない語り口であるが、作者のこころの褰が垣間見え、花蓮の本意を捉えたなかなか巧緻な作品である。

火蛾落ちし水のさざ波なりしかな

戸栗 末廣

誘蛾灯に寄つてきた「火蛾」は弱つていたのであろうか。作者はそれが水の面にぼとりと落ちるのを眼にしたのである。ところが、そこに思いがけず涼やかなさざ波が生れたのである。疎ましい存在の「火蛾」が作った思わぬ美しい景に、作者は小さな驚きを覚えたのである。俳句は小さな驚きの詩。

恒星圈

田中みのもる

天文館宇宙の目高飼はれをり
六月や花嫁送る時の道
それぞれの鉢の浮葉に名前あり
亀の子の重なり合へる札所かな
百円の海釣公園梅雨あがる

土屋酔月

働いてゐる蟻見つめゐて余生
鉛筆を放り投げたる西日かな
夏空や日落ちて高き山ふたつ
夏蝶の影石垣をのぼりけり
老いてなほ華やぎのほし夏帽子

戸田春月

明易し枕辺にある診断書
四人目の生まれると言ふ心太
風光りひとつひとつの墓光る
葱伏せて海の高みを鳥の群
湯の街を水音走る夏柳

島人に日の出日の入り時計草
大南風旗のごとくに烏賊干され
裏側に空蟬すがる滑り台
早梅雨青年窓に腕あづけ
チワワ連れ白靴のくる朝の橋

長屋璃子

黒南風や献体と云ふ旅立ちも
五月闇音せぬ時も日の中に
大落暉見しより欲りぬ胡瓜もみ
藪座布団後ろ姿がもの云ひぬ
抱き上げて子に採らせむか天仙果

獅子座

山尾玉藻推薦

渡邊美保

すべりひゆ轢いて戻りし旅靴
幾重にも畳んで仕舞ふ蛇の衣
緑雨の扉押せりアフリカ料理店
花柘榴茶封筒より出す写真

奥田順子

裾からげ大道芸人炎天下
子の部屋の引き出しからつば星祭
洛中にクレイン揚がる梅雨入かな
ひとり居に溺れさせたる水中花

森茂子

大安吉日くじの売場の西日かな
子の家と気付く間にあり昼寝覚
紀の国の水美しき植田かな
パラソルで素通りしたる株の街

垣岡暎子

春眠の髪を重たくもたれらる
旅靴と深夜放送明易し
雨をんななひとりゐるらし心太
パスポートにまこと縁なし夏の月

大塚のぼる

大阪の街を見下ろすかたつむり
さるすべり明治のままの小学校
金比羅宮まで草笛の父につき
父の押す車椅子なり螢狩

西畑敦子

清め砂撒きし新居の梅雨の月
でで虫や転居届の二三行
引越しの先頭をゆく目高かな
引越しの荷より跳び出し蠅虎

松山直美

峰雲やタールの匂ふ船溜り
湖へ抜ける径なり夏蓬
讚美歌に歩を止めたれば青蜥蜴
甘さうな杏食みつつ杏挽ぐ